

並型人工魚礁効果調査

担当者 課長 津幡 文隆
助手 長谷川 義彦
普及員 日下部 元尉智

I 目的

前年度に同じ

II 調査方法及び内容

1. 深浦漁業協同組合

- イ、月別操業同数及び漁獲量調査
- ロ、適地及び環境調査
- ハ、漁業試験（刺網使用）
- ニ、利用状況調査（抽出調査）

2. 岩崎漁業協同組合

- イ、利用状況調査（アンケート）
- ロ、魚礁における漁獲量調査
- ハ、魚礁の経済効果

III 調査結果

1. 深浦漁業協同組合

イ、深浦港における磯漁業に従事する全漁船の操業同数を昭和35年より、昭和38年まで、年次毎についてみると漸次減少している。月毎にみた場合も5月から10月にかけて減少傾向がうかがえるのは近年目立って多くなってきた出稼によるものと考えられる。

磯漁業の主要魚種はヤリイカ、マダイ、マス類で、そのうち最も多いのはヤリイカである。

これ等主な魚種について

昭和37、38年の漁獲高をみると、ヤリイカ、ヒラメ、カレイ類は増加し、タイ類は減少している。

ロ、前年度決定した魚礁設置適地場所について組合内で異論が出たため、再度調査を行い図1のとおり決定した。

併せて設置予定地附近の環境調査も行ったが水深52m底質は細砂であった。

ハ、マガレ場附近において刺網による漁獲試験を行ったが、マコガレイ、マガレイ、イシガレイ、ハバガレイ、カジカ類でマコガレイは2～3月頃産卵のため、この地区に蟄集するものと思われる。

ニ、磯漁業者200名中、18名を対象として調査した結果操業日数についてはヤリイカの時期である1～4月及びタイの漁期である9～10月に多い。地先海面を4海区（図2）に分けて個人別にしてその月の地区別漁獲割合を聞きとりにより、調査したところヤリイカについては1月にはA海区、2月はA、B、Cの各海区、3.4月はA海区でという傾向が認められたが、全般

に広く漁獲している。

2. 岩崎漁業協同組合

イ、魚礁の利用状況は年により若干の相違がみられるが月毎の操業人員については3～5月、8～9月又は9～10月の2つの山がみられ過去4ヶ年の傾向としては3～6月には年と共に、増加し、8～10月にはやや減少している。延操業日数についても、同様の傾向を示している。

ロ、魚礁で漁獲される主な種類はヤリイカ、ソイ、メバル類、ススキ、ヒラメ、マダイ、カレイ類、アイナメで漁獲費はヤリイカ、メバル類、ソイ、ヒラメ、マダイ、アイナメの順となっている。

ハ、並型魚礁を天燃礁（沖の瀬）と陸岸との中間に設置したことによって沖の瀬において操業するよりむしろ魚礁周辺において操業するようになった。

IV 考 察

魚礁設置による効果の有無について深浦漁協関係は、今後に俟たねばならないが昭和32年以来、継続して設置して来た岩崎漁協の魚礁については、設置前に比して水揚げが上向いており、全く漁場価値の無かった地区から水揚げが可能となったことは回遊魚群を沖の瀬から、魚礁へ誘致したものととして更に陸岸にも移動して定置漁業に好結果をもたらしているものとして、一応魚礁の経済効果と考えることが出来るであろう。

また、魚礁における漁獲物の変動をみると、ヤリイカ、ソイ、タイ、ヒラメ、マダイは魚礁と関連性のある魚種と考えられ、その反対にスズキは余り関連性がないものと考えられる。アイナメ、メバルについては附近の岩礁との交流が甚しく一定しない。

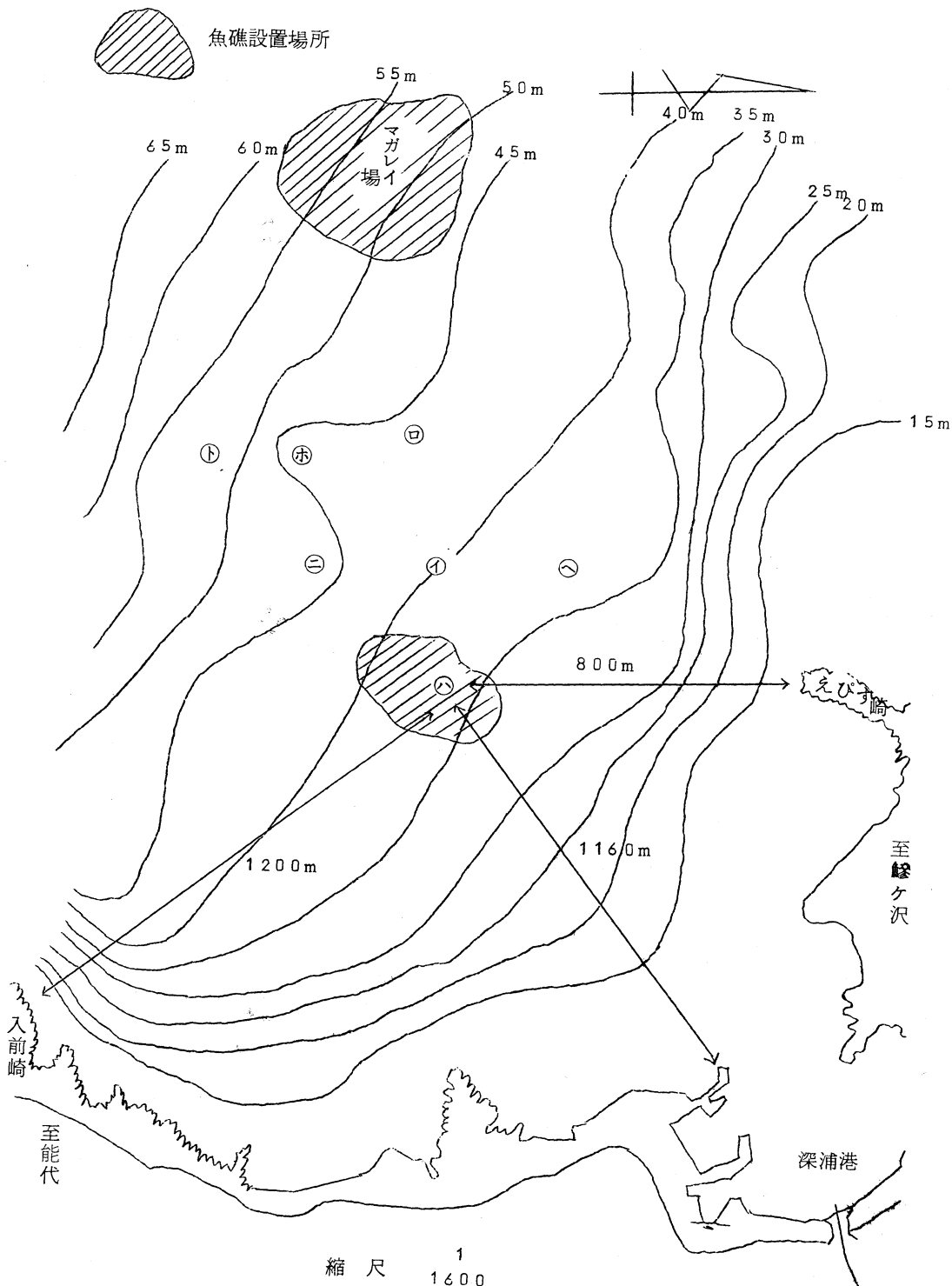
なお、結果において述べたとおり魚礁の利用は年と共に増加していることは魚礁設置による効果を果している訳である。

昭和38年度、漁場改良造成事業効果（指定）調査中間報告書及び「昭和39年2月魚礁設置の方法等に関する資料」参照

なお参考資料として

昭和38年10月 くろしお号によるむつ湾潜水調査（ホタテガイ、アカガイならびに魚礁の観察）参照

深浦地区における魚礁設置予定場所



深浦地区における海区別及び魚礁投入予定場所地点

